

魯迅と八卦掌

渡辺, 宏明

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

103

(開始ページ / Start Page)

237

(終了ページ / End Page)

244

(発行年 / Year)

1998-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004616>

魯迅と八卦拳

渡辺宏明

魯迅の『彷徨』に収められている「石鱗」（1924年執筆。原題「肥皂」）で、主人公の息子は、「八卦拳」を練習している。

この八卦拳と、主人公の息子の「学程」という名の関係について、述べたい。

八卦拳については、学習研究社「魯迅全集」を見ると、原注として次のようにある。

八卦拳 拳術の一種。多く掌法を用い、その型は〔易の〕八卦をかたどる。

清末に一部の王侯大臣が、「五四」前後に封建復古派が、それぞれ「国粹」としてこれを提唱したことがある。

「石鱗」は、これまでに何度か日本で翻訳されているが、「八卦拳」についての説明は、「魯迅全集」の原注の訳が最も詳しい。

中央公論社「世界の文学」（1967年）、講談社「世界文学全集」（1975年）、岩波書店「魯迅選集」（1956年）、筑摩書房「魯迅作品集」（1966年）では原文のまま「八卦拳」としているだけで、ルビも説明もない。

青木書店「魯迅選集」（1953年）では中国語読みのルビをつけているが、この言葉が出てくるところが二カ所とも「八卦拳」と誤植になっている。

改造社「大魯迅全集」（1937年）では、最初が「拳闘（支那の）」となっていて、二度目は単に「拳闘」となっている。

竹内好は、岩波書店「魯迅選集」と筑摩書房「魯迅作品集」では「八卦拳」としているが、筑摩書房「魯迅文集」（1976年）ではなぜかこれを「太極拳」と訳している。「魯迅作品集」は、それまでに竹内好が訳したものをまとめたものであるから、「魯迅選集」と同じ訳になっているのは当然であるが、新たに訳し直した「魯迅文集」でわざわざ「太極拳」としたのは理解できない。

「魯迅全集」の注にあるように、八卦拳は、「拳」とは名が付いているが、他の多くの拳術とは違って、握った拳を用いることはほとんどなく、掌法によって攻防を行う武術で、「八卦拳」と呼ばれるよりも「八卦掌」と呼ばれること

の方が多。また、「八卦」は、漢音で読めば「はっか」だが、我が国では、俗に「当たるも八卦、当たらぬも八卦」と言うように、「はっけけん」「はっけしょう」と称されている。

なお、一般に、「八卦拳」は「八卦掌」の別名であるが、「八卦拳」には、「八卦掌」とは全く異なる武術の「八卦拳」もある⁽¹⁾。本稿では、以下、「八卦掌」で統一する。

八卦掌は、清末の董海川（1813? - 1882）が編み出した武術である。董海川が故郷の河北省文安県で学んだ武術と、咸豊年間に浙江の山中で見た、道教の、「転天尊」という、円周をめぐる修行法とを融合させ、「転掌」の名で教え始めたものが、後に「八卦掌」に改められたものである⁽²⁾。八卦掌は、剛的な動きを主とする少林拳系統の拳法を「外家拳」とするのに対して、太極拳、形意拳とともに「内家拳」に属するという分類のされ方をするが、八卦掌と太極拳、形意拳がその淵源を同じくしているわけではない。「外家」「内家」とは、日本で言えば「出家」「在家」のことであり、仏教寺院の少林寺に結びつけられるものを「外家」と呼んだのに対して「内家」と称しているに過ぎない。もちろん、「外家拳」と呼ばれるものも、少林寺に結びつけられているとは言っても、必ずしも少林寺に関係があるわけではない。

「石鱗」では「八卦拳」となっているが、名称としては「八卦掌」が古く、「八卦拳」は、孫祿堂（祿堂は字。名は福全）が1918年に『八卦拳学』⁽³⁾を著して初めて使われるようになった言い方である。以後、1928年には黄柏年が『龍形八卦掌』を著し、1934年には孫錫堃が『八卦拳真伝』を著し、1935年には杜召棠が『游身連環八卦掌』を著し、1936年の呉図南『国術概論』では「八卦拳」として取り上げられるというように、しばらくの間「八卦拳」「八卦掌」と名称が揺れていた。魯迅が「石鱗」を書いたのは1924年であり、孫祿堂の『八卦拳学』の6年後である。

「魯迅全集」の原注によれば、清末の高官や復古派が八卦掌を推奨したということであるが、それはなぜか。

八卦掌の創始者董海川は、事情は不明ながら、宦官となっていた⁽⁴⁾。南に遊んで独自の武術を編み出した後、同治4年（1865）到北京に帰り、最初は宮中に仕えたが、後に肅王府で働いた。以後、同治13年（1874）に職を辞すまで肅王府にあり、七品の地位にあった。また、董海川の高弟の尹福（1841-1909）もまた肅王府に仕えたが、光緒帝が尹福に八卦掌を学んだという話も伝えられ

ている⁶⁾。これらのことから、清末の高官や復古派が八卦掌を推奨するようになった可能性はある。

ただし、中国では、伝統的に、文人に比べ武人は社会的地位が低く、社会的影響力を行使する立場にいる者は、武術を実用的な技術としては重視するが、武術家自身が尊重されるということはない。例えば、清朝最後の皇帝溥儀が満州国皇帝となった時、八極拳という武術の使い手たちが身辺警護に当たっていたのだが、溥儀は、『我が半生』ではそのことには触れていない。『我が半生』で唯一武術に関わることが述べられているのは、1937年6月28日、溥儀の直属部隊である護衛軍が日本人ともめごとを起こした時に、護衛軍が「せっぱつまって、武術を使って抵抗した」とあるところだけである。

清末から民国にかけては、北京に各地から武術の名手が集まった時期であり、教授、交流も盛んで、民間でも流行し、義和団にも結びつくようになっていった。また、武術をさして「国術」というようにもなり、1927年には、主要な伝統武術の教授の場として中央国術館が設立されている。

魯迅が「石鱗」を執筆した時期は、中国の伝統武術を発揚させようとしていた時であり、特に八卦掌だけが盛んだったわけではない。

そう考えると、魯迅が、「石鱗」の主人公の息子に練習させるのは、八卦掌でなくとも、当時北京で盛んだった太極拳でも形意拳でもよさそうなものであるが、八卦掌であるところにはそれなりの必然性があるのではないかと思われる。「魯迅全集」ではその理由を八卦掌が「国粹」として提唱されていたことを挙げているが、それだけではなく、魯迅は、ある人物を念頭に置いていたのではないかと考えられるので、以下、それについて述べたい。

「石鱗」の中で筆者の目を引いたのは、「八卦拳」という言葉と、それを練習している息子の名である。

息子の名は「学程」である。「絵児」とも呼ばれるが、学習研究社版の訳注によれば、これは幼名であるという。筑摩書房『魯迅文集』は「学程が学名で絵が幼名」と注をつけており、改造社「大魯迅全集」は「絵児」に「せんちゃん」とルビをつけ、「学程の乳名」と訳注を入れている。「絵児」が幼名で「学程」が名であるということに疑念はないが、魯迅の中で、この「学程」という名を与えるにあたって、その学程が練習している八卦掌との連想が働いたのではないだろうか。

「学程」を一語とみなせば、「学歴」や「文化程度」という意味であるが、文

とみなせば、「程を学ぶ」あるいは「程に学ぶ」ととれる。八卦掌で「程」といえば、まず連想されるのは程廷華のことである。

程廷華（1848-1900）は八卦掌の創始者董海川の弟子であり、『八卦拳学』を著した孫禄堂の八卦掌の師である⁶⁶。眼鏡店を経営していたことから「眼鏡程」とあだ名され、董海川の弟子の中でも尹福と並んで名を知られている。1894年には形意拳の李存義らと語らって、八卦掌、形意拳、太極拳を一家と見なし、互いに教授し交流するようになった。先に述べたように、この三派を「内家拳」として一つのグループに分類するのはこれに影響されている。

この程廷華は、その死によって、さらに名を知られることになった。程廷華が死んだのは、1900年、義和団の運動が最高潮に達し、八ヶ国連合軍が北京に乗り込んだ年である。義和団は別名「義和拳」⁶⁷とも言われたように、武術との結びつきが深く、程廷華自身は義和団の関係者ではなかったが、混乱に巻き込まれ、単身ドイツ軍の巡邏隊を相手に戦い、銃弾に倒れたと言われている。

以後、程廷華の生涯、特にその最期は、伝説として語り継がれていくことになる。

例えば、『北京武林軼事』（武術家の伝説を短編小説風にまとめたもの）所収の「二程高奏正気歌」では、程廷華の最期は次のように語られている。

1900年8月14日、八ヶ国連合軍が北京に攻め入り、家を焼き暴行を働き町中血で洗うようなありさまとなった。程氏兄弟（題の「二程」とは程氏兄弟二人を指す）はすでに心中の怒りの炎を抑えることができず、ひそかに武術界の志士と連絡を取り、侵略者に抵抗する戦いに加わる用意をしていた。

ある日、程廷華が春秋宝刀を上着に隠し、崇門外の磁器口で友人と抗戦のことについて相談するために出かけ、河泊廠胡同まで来ると、むこうからドイツ侵略軍の一隊がやってきた。必ず身体検査をするので、程廷華は、すでに窮地を脱することができないことを知り、侵略者が近寄るのを待たず、声を発して春秋宝刀を抜いたが、光が走ったかと思うと、二人の侵略者の首が地面に落ちた。その時、ほかの侵略者たちは驚き呆れていた。何事が起こったのか理解するのを待たずに、程廷華は宝刀を舞わせ、バタバタとまた二人倒した。それから、八卦掌の絶技「脱身換影」で身を躍らせると、河泊廠胡同46号の家の屋根の上に跳び上がり、別の家の屋根に飛び移ろうとした時、ドイツ侵略軍の一斉射撃が彼を襲い、程廷華は身に数弾を受け、血は屋根を染め、壮烈な犠牲と

なった。

侵略軍は河泊廠を包囲して一日捜査したため、程廷華の遺体は一日屋根の上に置かれていた。侵略軍が離れた翌日になって、程廷華の次男の程有信がやっと遺体を背負って家に帰った⁽⁸⁾。

魯迅は老舎のように武術を学んだ経験はないようだが⁽⁹⁾、「石鱖」執筆当時は北京におり、程廷華の話を知っていたのではないだろうか。

しかし、魯迅が程廷華のことを知っていたとしても、果たしてほかのものに関連づけた名を、小説の登場人物に与えるかどうか、という疑問が生じるが、そういうネーミングを行っていることはすでに指摘されている。

例えば、雑誌「中国語」（内山書店）に連載された「葉」の精読で、丸尾常喜は次のように指摘している。

魯迅は秋瑾の犠牲とこの「人肉餛飩」を重ねている。第三節でこのとき処刑された人物が夏家の息子で、革命家であったこと、第四節で名を瑜ということが明らかにされるが、「夏」は「秋」，「瑜」は「瑾」（ともに玉の一種）に対する言い換えである。作者は、この扁額を記し、さりげなくその血が革命家のものであることを示しているのである。（1996年4月号）

華小栓と夏瑜の両者の姓を合わせると「華夏」（中国の古称）となる点にも作者の工夫を見ることができよう。（1996年6月号）

このように、魯迅は、登場人物に名前を付けるにあたって、何かに関連づけるということをしている例がある。「石鱖」において、名が「学程」で、八卦掌の練習をしている、というのは偶然ではなく、そこには魯迅の意識的な命名がなされていると考えられるのである。

《注》

- (1) 『中国武術大辞典』では、「八卦掌」とは別に「八卦拳」の項目を立てている。その一部を訳すと、次のようになる。

①拳種の一つ。山東、河北、河南省に広まる。清初にはすでに伝えられていた。②套路（型）の名。武術界には、八卦という名を付けた套路が多くある。

この①の「八卦拳」は、本稿で述べる「八卦掌」とは全く別種のものである。

- (2) 董海川と八卦掌については、康戈武「八卦掌の源流について」（福昌堂「武術」

1992年冬号および夏号掲載)が詳しい。

- (3) 孫禄堂の著作は、現在では、『孫禄堂武学著作大全簡注』にすべて収められている。
- (4) 董海川の肖像画が伝えられているが、それを見ると、ふっくらした体つきで、髭がない。

万籟声は、1926年に著した『武術匯宗』の「行意八卦太極泛論」の中で、「董は(南遊から帰った)後に法に触れ腐刑を受けた」と述べている。

- (5) 『北京武林軼事』所収「光緒皇帝学練八卦掌」
- (6) 程廷華が「孫禄堂の八卦掌の師である」と述べたが、孫禄堂はほかにも師について太極拳、形意拳を学び、『太極拳学』『形意拳学』を著している。また、三派の名人の逸話と教えを集めた『拳意述真』を1923年に著しているが、その中で、程廷華が董海川に学んだ武術の名を「游身八卦連環掌」としている。ここにも、八卦掌の名称が固定していなかったことを見ることが出来る。

なお、『拳意述真』では、他の先人については享年や最期の様子などを記しているが、程廷華の最期については触れていない。

『拳意述真』における程廷華の小伝は以下の通り。

程廷華先生は直隸深県の人である。北京花死大街四条に住み、眼鏡屋を生業としていた。武術を好んでいたが、つてがなく、後に人の紹介で董海川先生を拜して師とした。学んだ拳は游身八卦連環掌である。伝授されて後、習練すること数年、その精緻を得、名声は大いにふるい、人はこれを「眼鏡程」と呼び、知らぬものはなかった。同道の者で、腕比べに来るものははなはだ多かったが、先生の手には敗れない者はなく、そのために恨みを買った。ある夜のこと、先生が前門から店に帰り、芦草園に至り、歩いていると、突然後ろから走ってくる足音が聞こえた。先生が振り返ると、ついてきた者は手にした刀をきらめかせ、まさに先生めがけて打ち下ろそうとしていた。先生はすぐに身を縮めると、たちまち二メートルほど離れたので、刀は空を切った。すぐに身を返し、刀を奪って蹴り倒すと、刀を投げつけ、「朋友、家に戻ってさらに功夫を積み、それから来なさい」と言うので、相手の名を尋ねることなくゆうゆうと去った。その時、数人がそれを目にしていた。都で教授した門徒はすこぶる多く、その子の海亭もまた、先生の技術の精奥を発揮するに足る人物である。

また、孫禄堂は、『拳意述真』で、董海川について次のように小伝を記している。

董海川先生は、順天(旧府名。北京の周囲の土地)文安県朱家塢の人である。武術を学ぶことを好み、かつて浙江・江蘇から安徽にかけて旅し、異人に出会って教えを受け、そこにいること3年、拳術、劍術、および各種の武器、いずれも

極めないものはなかった。帰って後、爾王府の使用人となったが、特殊な技能を身につけていることを知る人が多く、門下に身を投じ教えを受けようとするものがあとを絶たなかった。教えたところの拳術は、名を八卦という。その形式はいずれも河図洛書の数であり、その道体はみな先天後天の理である。その用法は八、八、六十四卦の変化であり窮まることがない。易理は先生の心中にあり、体中に行き渡っている。先生の行住坐臥、動作の際の変化の神妙さは、予測できるものではない。ある時、結跏趺座している時、ちょうど夏の大雨に遭い、壁が突然倒れてきたことがある。その時先生は炕の上に座っており、その壁のすぐそばにいた。先生は目を開けることなく、そばにいた弟子が、壁が倒れて来るのを見て、急いで先生に目を向けると、姿が見えず、すでにほかの場所の椅子の上に座っていて、体には塵もついていなかった。先生はまたある時昼寝をしていたが、秋も深まったころだったので、弟子が布団をかけようと、そっと体にのせると、布団は寝台にかぶせられ、ただ寝台と布団があるだけで先生の姿はなかった。驚いて振り返ると、先生は窓際の椅子に端座しており、「なぜ声をかけない。驚いたではないか」と言った。思うに、先生の靈機は、見ず聞かずとも知覚できる境地に達していたのであろう。故に、不測の危険に臨んでも、その変化の神妙さはかくの如くあったのだ。中庸に言う「至誠の道は以て前知すべし」とは即ちこの意である。年80余歳にして端座して逝く。弟子の尹福、程廷華らが、東直門外、椴樹の東北、紅橋大道のわきに葬った。門弟たちは墓碑銘をたて、その行跡を記した。

- (7) 戦後日本で「少林寺拳法」という武術を広めた宗道臣は、戦時中、大陸にいた時に義和門拳という武術を学び、それをもとに少林寺拳法を創始したと称しているが、筆者は、義和門拳という武術については寡聞にして知らない。

また、「義和団」の別称として「義和拳」といった場合は、さまざまな武術を学ぶ者が集まった組織の名称であって、特定の武術を指すものではない。その場合の「義和拳」という名称については、G・N・スタイガー『義和団 中国とヨーロッパ』が詳しい。

一方、特定の武術をさしている「義和拳」は「梅花拳」の名を改めたものである。「義和拳」と「梅花拳」の関係については、三石善吉『中国、一九〇〇年 義和団運動の光芒』が詳しい。

余談になるが、宗道臣が特定の武術としての「義和拳」を学んだとするとそれは「梅花拳」のはずなのだが、宗は著書『秘伝 少林寺拳法』の中で中国での修業時代のことに触れ、「湖北の袁君は梅花拳というのを見せてくれたが、剛法こうぼう（突き蹴りの技術）のかんたんなものであった。」と述べている。

- (8) 『北京武林軼事』には、ほかに、程廷華にまつわる話として、「“眼鏡程” 義眼 “快刀王”」「“眼鏡程” 的死因」が収められている。
- (9) 老舎が武術を学んだ経験があることについては、『四世同堂』（下）巻末の年譜の1923年のところに、「五月十四日、運動不足を痛感したので、この日から拳の

練習をはじめるとある。また山東時代には武術家ともつきあっていたという。老舍の作品には、具体的な武術の技法名がしばしば見られ、武術家を主人公にした短編「断魂槍」（断魂槍は実在する武術）もある。また、『離婚』では、言葉のやりとりを、太極拳の技法の攻防になぞらえている。

参考文献

（中文）

『中国武術大辞典』中国武術大辞典編輯委員会・編著。人民体育出版社。1990年。

『中国武術史』習雲太。人民体育出版社。1985年。

『孫祿堂武学著作大全簡注』海燕出版社。1992年。

『北京武林軼事』張宝瑞・編北京燕山出版社。1987年。

『武術匯宗』万籟声。香港錦華出版社。（発行年記載無し）

（日文・書籍）

「大魯迅全集」改造社。1937年。

「魯迅選集」青木書店。1963年。

「魯迅選集」岩波書店。1963年。

「魯迅作品集」筑摩書房。1966年。

「世界の文学」第47巻『魯迅』中央公論社。1967年。

「世界文学全集」第93巻『魯迅』講談社。1975年。

「魯迅全集」学習研究社。1984年。

『四世同堂』（下）日下恒夫・訳。学習研究社。1983年。

『我が半生』（上・下）愛新覚羅溥儀。小野忍・野原四郎・新島淳良・丸山昇訳。筑摩文庫。1992年。

『義和団 中国とヨーロッパ』G・N・スタイガー。藤原喜久男訳。光風社。1990年。

『秘伝 少林寺拳法』宗道臣。光文社カッパブックス。1963年。

（日文・雑誌）

「八卦掌の源流について」康戈武。「武術」福昌堂。1992年冬号～夏号。

「魯迅「药」（「薬」）」丸尾常喜。「中国語」内山書店。1996年4月号～7月号。